

「たんぽぽん」

作…油田 晃

登場人物…ナツヒコ

ミドリ

ハッチャン

舞台

…椅子や机にも使えそうな箱が幾つか。

台本上、具体的に明示するが、それは抽象的なモノで表されて構わない。

(1・春 部室 3月1日)

どこからともなく、

ピアノの卒業式で流れるような曲が聞こえる。

舞台には既に明かりが入っている。

演劇部の部室と思われる空間がそこにはある。

と、

ミドリとハッチャンが、卒業証書の筒を持ちやってくる。

ミドリは、1人で2本の卒業証書の筒と、一冊のノートを持っている。

2人の胸には花のコサージュでもついているのだろう。

ミドリ … (ゆったりとした足取りで、部屋を歩く)

ハッチャン … (その姿をぼんやりと目で追いながら、どこかに座る)

ミドリ … …、やっぱり寂しいって感じるね

ハッチャン … そうだな

ミドリ … うん、寂しい。改めて寂しい。

ハッチャン … いや。まだまだ。これから。うん、これからだ。

ミドリ … そう、「君たちの未来は、今から始まる。」

ハッチャン … (鼻歌ぼく) ♪ あおげばくとうとしくわがしの… … あおのさ、

ミドリ … ん？何？

ハッチャン … 壁にさ、なんか記念、残しておくか？

ミドリ … 怒られるよ、

ハッチャン … 先輩達が去年、書いてたよ、壁に。

ミドリ … 書いてたねえ、

ハッチャン … マジック、ないかな、…何書く？

ミドリ … … (2本の卒業証書を見る)、ハッチャン。

ハッチャン … 何？

ミドリ … あたし、今からさ、もう一度、体育館戻ろうと思うの。

ハッチャン … どうして？

ミドリ … あそこで、私たち、一杯稽古したじゃない。あそこで、一杯、喧嘩もしたし、泣いて笑ったじゃない。

ハッチャン … そうだね。

ミドリ … 舞台にお礼が言いたいの。なんか、発声してみたいし。

ハッチャン … あめんぼあかいなあいうえお

ミドリ … うん、きちんとお礼がしたい。ありがとうございました。

ハッチャン … そだね。壁に書いてちゃダメだよな。

ミドリ … そうだよ。

ハッチャン … あ、もう一つ、やり残してる事があるよ。

ミドリ … え？

ハッチャン … だって、ほら（と、ミドリの持つてるノートを指す）

ミドリ … そうじゃん、そうじゃない。

ハッチャン … よし、じゃあ、行こう。

ミドリ … うん。

2人歩き出す。

ハッチャンはハケ、ミドリだけ残る。

ミドリに明かり。

ミドリ … ここに一冊のノートがある。どこにでもある大学ノート。だけど私にはこれから先、この学校を今日、私は卒業するけど、これからもずっと忘れない、忘れることの出来ない一冊のノートだ。このノートには、お芝居の台本が書かれている。私の友達、ナツヒコが書いたモノだ。

ナツヒコは、ある夏の日から、「変わらない人」になってしまった。それを今から話したいと思う。

それは、ちょうど、今から半年以上も前、夏休みに入ってからすぐのことだった。

ミドリは、ハケ。

その間に、ナツヒコとハッチャンは、夏な格好で、部室にいる。

(2 7月下旬 部室)

蝉の声が聞こえる。

明かりがつく

ナツヒコ・ハッチャン、うちわや下敷きで自分をあおいでいる。

ナツヒコ … (パタパタパタ、止まる) ううわあ、ゲロ暑くない？

ハッチャン … ゲロ暑い？

ナツヒコ … むちゃくちゃ暑いぞ、これは。

ハッチャン … サウナ、だね。

ナツヒコ … これね、俺が思うに、あおぎ続けないと死ぬんじゃないか？

ハッチャン… どうしてえ？
ナツヒコ… ほら、あおぐのやめてみ？
ハッチャン… (止める) うわ、もわく、アツく、死ぬく、
ナツヒコ… ね、これ、どうする？
ハッチャン… あ、ジャンケンジャンケン、
ナツヒコ… お！よろし、
2人… ジャンケンポン、アイコデシヨ。

ハッチャンが勝つ。
ナツヒコ、ハッチャンをうちわ&下敷きであおぐ。

ナツヒコ… イくちく、ニく、サくんく、シく、ゴく、ロくクウく、シチく、
ハアくチイく、キュウウく、ジュウウウく。あつつう。
ハッチャン… 極楽極楽。
ナツヒコ… よおくし、ジャンケン、ジャンケン
2人… ジャンケンポン

ハッチャンが再び勝つ。

ナツヒコ… うそお
ナツヒコ、再び、うちわ&下敷きであおぐ。

ナツヒコ… (凄い早さで) イチニ… キュウジュウ！
ハッチャン… ずるっ！
ナツヒコ… よおくし、ジャンケン、ジャンケン
2人… ジャンケンポン

ハッチャンがまた勝つ。

ナツヒコ… もうやめよ、もうやめよ。ハッチャン、ジャンケン強いのを忘れてた。

ハッチャン… あ、もうじきミドリも来るよ。
ナツヒコ… そうだよ、そうじゃんかよ。あいつはさ、俺らをこんな暑いところに呼んでおいて、なんで、あいつが一番最後にやってくるのだ、ああ？え？え？説明せよ！60字以内！

ハッチャン… (苦しめられながら) 『3年生である我々演劇部員たちに、秋の文化祭をどうしてゆくの、ミドリは聞きたい』。60字くらい。

ナツヒコ… 何それ？

ハッチャン… 秋の文化祭で、教室でやるじゃんか、

ナツヒコ… おん、

ハッチャン… それをミドリはどうもやりたい…らしい。

ナツヒコ …… そんなの、やるなら台本とかもう決めないとダメじゃん。
ハツチャン …… 1・2年は大会あるからさ、今から、俺らが動いて先生に話通せば出来るんじゃないのって？
ナツヒコ …… 何？ハツチャンやる気なの？
ハツチャン …… いやあ、そうやってミドリが言ってるの。
ナツヒコ …… 1・2年がやればいいじゃん、
ハツチャン …… だから、最後にもう一回、自主企画と銘打って俺らでさあ、
ナツヒコ …… ハツチャン。やるんでしよう？
ハツチャン …… いやあ、だからミドリが、
ナツヒコ …… (遮り) さっきから、「俺らが」って言ってるよ、
ハツチャン …… いやその、だからね、
ナツヒコ …… (遮り) 受験どうすんの？
ハツチャン …… なんとかなるのかなああって、
ナツヒコ …… なんとかならないよ、
ハツチャン …… あら、大人な発言、ナツヒコさん。
ナツヒコ …… いやあ、勉強しないとさあ、一応
ハツチャン …… そこをなんとか。
ナツヒコ …… どういうこと、
ハツチャン …… ・・だからあ、
ナツヒコ …… ん？・って、ことは何？ひよつとして、俺に台本を書けとかいう、話をさ、あいつはさ、・・・・

ト、

夏の格好をした、ミドリがやってくる。

ミドリ …… うわ、何ここ、ゲロゲロ暑いじゃない？
ハツチャン …… ゲロゲロ暑い？
ミドリ …… めちゃくちゃ暑いよ、これ。
ナツヒコ …… さっき、俺がゲロ暑いって言ったから、さらに上だな、暑い・ゲロ暑い・ゲロゲロ暑い、最上級の暑さだ。
ミドリ …… なに、なんでこんな所いるの2人は？
ナツヒコ …… ハツチャン・お前が呼び出したんだろうが！
ミドリ …… ！
ナツヒコ …… ハツチャン・ああん！！
ミドリ …… ああ、ごめんごめん。じゃあ涼しいところで話そうか、
ナツヒコ …… いや、こうなったら意地でも、ここで聞いてやる、な。
ハツチャン …… 僕は・
ナツヒコ …… ハツチャン、な。
ハツチャン …… うん、ここで話し合おう。
ナツヒコ …… あの、暑いから、手短に話せよな
ミドリ …… うん、あのね、ハツチャンと話していてね。えとね、どこから話そう。この間終業式だったじゃない、(ナツヒコ・オウ)そのと

き、先生に言われて、2人でここの掃除してて、掃除って言うても、大した事やっなくて(ナツヒコ..うん)、いろいろとゴミとか拾って、いやあ、いらぬものもあるよねとか話していたの(ナツヒコ..うん)、で、そこに1・2年やってきてなんか大会の準備で忙しい訳よ(ナツヒコ..オウ)、小道具どうするとか、衣装の仮縫いが終わったとかやってたのね(ナツヒコ..うん)、そしたら、あ、これはそのときに出た話じゃなくて(ナツヒコ..違うのか)、その後、コンビニでジュース買ってる時に・

ナツヒコ ..だから手短にしゃべれ、

ミドリ ..えーと、えーと、ですね、そのコンビニで、ジュースを買って、

ナツヒコ ..秋の文化祭だろ！

ミドリ ..うん、うん、

ナツヒコ ..芝居を打とうと、

ミドリ ..うん、うん、

ナツヒコ ..うん、うん、なぜ俺がまとめる？

ミドリ ..不思議だ

ナツヒコ ..不思議だろ

ミドリ ..うん

ナツヒコ ..で？

ミドリ ..で？

ナツヒコ ..うん？、いやいや。で？

ミドリ ..で？

ナツヒコ ..で？なんだよ？

ミドリ ..いやあ、その、去年、大会出た人間としてはさ、折角だからさ、

ナツヒコ ..もう一回、その芝居というものをやってみたいもんだなあ。

ミドリ ..今の大会手伝えれば良いじゃないかよ。

ハツチャン ..そんなのダメだよ、1・2年で一生懸命やってるじゃない。

ナツヒコ ..うん、秋の文化祭しかないな、

ハツチャン ..あのねハツチャンやりたいんでしょ？

ミドリ ..いやあ、ミドリが・

ナツヒコ ..言い出したのは私で、「やろう」と言ったのはハツチャン。

ハツチャン ..ほら、グルじゃん、

ナツヒコ ..書いて！(押む)

ナツヒコ ..いやだ(押む)

ミドリ ..なんだよそれは。

ナツヒコ ..(どこかを指さし)思い出そう、あの暑い日々を。

ハツチャン ..(そこを見て)流した汗と涙はウソをつかなかったぞ。

ミドリ ..頑張りよう、

ミドリ・ハツチャン..演劇！、(光る星を見て)キラーン！

ナツヒコ ..そういうのをやれば良いじゃん、文化祭。

ミドリ … 去年は一緒にやってくれたじゃん、
ハツチャン … 演劇！（まだやってる）
ミドリ … ええ、やろうよお、書いてよお
ナツヒコ … お前な、そもそもどうすんだよ受験は、
ミドリ … あ、お父さん、
ナツヒコ … ミドリ、お父さんはな、心配してるんだぞ。
ミドリ … あ、ちよつと似てる、
ナツヒコ … どうすんだよ、
ミドリ … だからあ、文化祭9月だから、そこまで頑張ってる、そこから、勉強すればさ、
ナツヒコ … 甘い。甘い、ミドリちゃん、
ミドリ … なんかさ、張り合いないんだって、ぶっちゃけ
ハツチャン … ぶっちゃけと来ましたか、
ミドリ … 家で勉強してもさ、「ああ、1・2年で上手くやれてるかな、大丈夫かな」とか、「稽古見に行きたいなあ」とか、すっげえ思うんだよね。
ハツチャン … 分かる分かる、すごく分かる。
ナツヒコ … でも、見に行けない。
ミドリ … 見に行っちゃったらさ、「私、やりまくす」とか言ってしまうでしょう、ぶっちゃけ
ハツチャン … ぶっちゃけなくても、そうでしょうな
ミドリ … だから、部室の日誌に書き込んで、
ナツヒコ … 何を？
ミドリ … え？
ナツヒコ … 何を書くの？
ミドリ … 「ミドリ、参上」とか、「がんばれ〜」とか、
ナツヒコ … あんた、未練ありまくりじゃないの。
ミドリ … だから、ハツチャンに、どう思うって聞いたら、
ハツチャン … ぶっちゃけ、芝居したいねえ。
ナツヒコ … お前もぶっちゃけかよ、
ハツチャン … ナツヒコが書いて、ミドリが出て、僕が舞監してさ、名トリオ、な、文化祭限定復活、あの名トリオが帰ってくる。
ナツヒコ … 名トリオねえ。
ミドリ … という訳なんすよ、ええ。
ハツチャン … そういう訳なんすよ、はい
ナツヒコ … そういう訳ってさあ、
ハツチャン … だから、ナツヒコが台本だけ書いて、
ナツヒコ … 書いたら、誰が演出するんだよ、
ミドリ … え？
ナツヒコ … そんなもん、1・2年って訳にいかないだろ。俺がしなきゃいけないだろが、
ミドリ … じゃあ、書いてくれるの？

ナツヒコ … え？いやいやいやいや、書かない、書かない。
ハツチャン … またまたまたまたあ。
ミドリ … 本当は実はこつそり書いていたりして、
ナツヒコ … (凶星)
ミドリ … 何？、この間。ひよつとして、凶星？
ナツヒコ … 書いてないよ、そんなの。
ハツチャン … 声がうわずってますぜダンナ。
ナツヒコ … (うわずって)うわずってなんかおりませんのよ、オホホホホホ。
ミドリ … (十) オホホホホホ、
ハツチャン … (十) オホホホホホ、

3人笑っている。
笑い、止まる。
間

3人 … あつい。
ナツヒコ … 俺、帰るわ、
ミドリ … ちよつとナツヒコ
ナツヒコ … 少し考える。
ハツチャン … さつすが、
ナツヒコ … やるとは言っていない。考える。
ミドリ … 来月には稽古をしたい。
ナツヒコ … 分かった。
ミドリ … やるんだ、
ナツヒコ … やるとはいっておらん。今後を鑑みながら、考えていきたい。
ハツチャン … お返事期待しております。
ナツヒコ … 夏期講習に行つて参ります。
ハツチャン … はい、お気をつけて。
ミドリ … えーと、不治の病になつてしまった人が主人公でというのを考えます。

ナツヒコ … 不治の病？ほおお、おん、考えておく。

ナツヒコ、ハケる。

ミドリ … ・ ・ ・ 書くね、あれは。
ハツチャン … 書いてるよ、あれは。
ミドリ … 書き出すと早いはずだから、ナツヒコは
ハツチャン … 言える言える
ミドリ … 上手く行くんじやねえのかあ？
ハツチャン … うん、上手くいくべき
2人 … 上手く、いくべき

ハッチャンはハケる。
ミドリ、少し歩くと止まる。
ミドリに明かり。

ミドリ .. 私は、今でもあのときにどうして「不治の病」なんて言葉を言っ
てしまったのだろうと後悔してしまふ。そういうことなんで言っ
てしまったのだろうと思っても、もう遅い。
私とハッチャンは、その後、部屋からすぐ家に帰った。
家に帰ると途端に猛烈な雨が降ってきた。

雨音が聞こえる。

ミドリ .. その雨は、かなりの時間降り続き、見通しの悪い中、
夏期講習を終えたナツヒコは、自転車で帰った。
ナツヒコは、その途中で、車と事故に、・・・あつた。

(3 救急治療)

救急車のサイレンの音

そこに加わる、心電図モニターの周期的なピツ・ピツとなる音

ミドリ・ハッチャン・ナツヒコ、病院の職員となり、

担架と思われる布を3人で持ちながら歩く。

A || ハッチャン、 B || ナツヒコ、 C || ミドリ

病院 A .. (その布をどこかにおろしながら) 聞こえる？ ナツヒコ君。聞こ
える？ 僕の手、握れる？

.. (遮り) 血圧下がってます、昇圧剤入れますか？

.. 今、病院着いたからね、すぐ治すからね、外傷は？

.. 大腿部ならび、腰椎付近を打撲。幾つかの擦過傷有り。

.. 傷は大したことないんだが。JCSいくつ？

.. 意識レベル、100です。

.. うーん

.. 先生、血ガス取りますよ。

.. うん、生化学の処理も出して、それから、レントゲン、ポータブ

ル呼んで、

.. はい

.. うん。血圧は？

.. 下がってます、

.. 昇圧剤！、・ねえ、この子、交通外傷なんでしょう？ 頭かなん

かぶつけた？

.. え？

.. 頭、ぶつけた？

.. 縁石にて頭部を強打した可能性有りと。

病院 C
病院 A
病院 C

病院 A
病院 C
病院 A
病院 B

病院 A
病院 B
病院 A
病院 B

病院 A
病院 C
病院 A
病院 B

病院 A

病院A ……何？
病院C ……縁石にて頭部を強打した可能性有り。
病院A ……それを早く言え。脳外に連絡とって、緊急CT！
病院C ……あ、はい
病院A ……（声を上げて）至急！
病院B・C ……はい！

病院A・B・Cは、去る。

ピツ・ピツと言う音だけが聞こえる。

暗転

（4 病室）

明かりがつく

そこは、病室である。

ナツヒコがパジャマ姿か何かで座っている。

ぼんやりと窓の外を見ている、そんな感じである。

見た目はそんなに変わらない。

さっきまでのナツヒコ、そんな感じだ。

ミドリと、ハツチャンがあらわれる。

ペットボトルを3本持っている。

ハツチャン ……4771、4771、あ、ここだ。

ミドリ ……なんか緊張しちゃうね。

ハツチャン ……病院へ行くのと、病室を訪ねるってやっぱり違うな、なんか

ミドリ ……深いこと言いますな

ハツチャン ……おんなじ病院でも違うねえ、

ミドリ ……うんうん、

ハツチャン ……（ノック）失礼します。おお、いたいた。

ミドリ ……ああナツヒコ、もう、びつくりしたよ。

ナツヒコ ……．．．．．（2人を見て）、うん、なんかやつちやったよ

ミドリ ……本当、びつくりしたよお、

ナツヒコ ……うん、なんか、ゴメン、交通事故を俺、起こしたんだってさあ、

ハツチャン ……だってさあ、じゃなくて起こしたんだよお、でも、大したケガじ

やなくてさ、よかったよ。

ナツヒコ ……．．．．．うん、

ミドリ ……やつぱり車の事故って注意しないと怖いよねえ

ハツチャン ……本当本当、ナツヒコ、お茶、飲む。

ナツヒコ ……お茶？．．．うん、

ハツチャン、ナツヒコにペットボトルを渡す。

ハツチャンも自分のを飲み、ミドリは今は飲まない。

ミドリ …… すぐ退院できるの？
ナツヒコ …… (飲んでいる)
ミドリ …… すぐ退院できると良いね、
ハッチャン …… そうだね、
ミドリ …… うん・・・、
ナツヒコ …… ・・・、ハッチャン、
ハッチャン …… ン？何？
ナツヒコ …… それ、ちようだい。
ハッチャン …… ナツヒコ、まだあるじゃん。
ナツヒコ …… ・・・、それ(ハッチャンが持っているペットボトルを指し)、
ちようだい。

ミドリ …… ？
ハッチャン …… うん(不可解)、いいけど、(と自分のをナツヒコに)
ナツヒコ …… (しつかりと自分のモノにする)
ミドリ …… (どこかに座り) しかし、これじゃあ、芝居ムリだよ、
ハッチャン …… 芝居の話は、また今度でいいじゃん、
ミドリ …… うん、そうだね、ゴメン、
ハッチャン …… とりあえず、ナツヒコが無事でよかったよ、うん、
ミドリ …… そだね、
ナツヒコ …… (唐突に) カバンの中にさ、
ミドリ …… うん、どうしたの？
ナツヒコ …… 俺のカバンの中にさ、台本あるんだって、
ハッチャン …… あ、さては、ちゃんと書いてたんだな、このヤロ、にくいね、
ミドリ …… さすがですな、
ナツヒコ …… そこにない？
ミドリ …… え？この辺？
ナツヒコ …… ・・・あ、2階かな、ハッチャン、2階にあがって、本棚がある
からさ、そこに台本が一杯並んでるところがあると思うよ。
ハッチャン …… ・・・ここ、ナツヒコの家じゃないよ、病院だよ、
ナツヒコ …… (何事もなく飲む) まだ台本、途中なんだよ、ゴメン。
ミドリ …… (微妙な変化に気づく。飲んでよい)
ナツヒコ …… (ミドリが持っているペットボトルに気付き) ミドリ、
ミドリ …… ン？何？
ナツヒコ …… それ、ちようだい。
ミドリ …… だって、ナツヒコ、持つてる・・・
ナツヒコ …… ちようだい。
ミドリ …… ・・・うん、(と手渡す)

ナツヒコ、あわせて3本のペットボトルを持っている。
どうしていいか分からない時間

ハッチャン・・・・・・、

ミドリ ……、あの、ナツヒコ、
ハツチャン ……行こうか、そろそろ。ナツヒコ、まだ落ち着いてないだ
ろうし、な。

ミドリ ……(ナツヒコをじっと見る) ……
ハツチャン ……ミドリ!

ミドリ ……うん、え?

ハツチャン ……そろそろ、

ミドリ ……うん、ナツヒコ、また来るから、うん、

ナツヒコ ……(ペットボトルを眺めながら) おう、

ミドリ・ハツチャン、病室を出る。

ミドリ ……なんかおかしいね、ナツヒコ

ハツチャン ……うん、交通事故のショックかなあ、

ミドリ ……うん。すぐよくなるよ、

ハツチャン ……そだね、…あれ?あれ、ナツヒコのお父さん・お母さん、

ミドリ ……泣いている、

ハツチャン ……どうしたんだろう?

ハツチャン・ミドリに明かり

ハツチャン ……ここからは、どうやって伝えて良いのか分からないけど、だけど、
あの時を冷静に振り返って、話そうと思う。僕とミドリは、ナツ
ヒコのお父さん・お母さんに声を掛けた。泣き崩れるお母さんと、
それを介抱しながらも体が小刻みにふるえているお父さんの姿を
見て、僕は、ただごとではないことがナツヒコの身にあったのだ
ろうと、ある種の覚悟をした。

ミドリ ……私たちは、休憩所に連れられ、そこで、お父さんはこんなことを
話し出した。さっきまで医者さんの説明を聞いて、お母さんは、
泣き崩れた、その話なんだろうと思っただ。

(5・休憩室にてナツヒコの父との会話)

ハツチャン ……あの、もう一回お願いします。

ミドリ ……はい、はい。高次脳機能障害(こうじのうきのうしようがい)で
すか?

ハツチャン ……こうじのうきのう…

ミドリ ……その可能性があるということですか?

ハツチャン ……高次、脳機能、障害…

ミドリ ……つまり、その、脳の機能に障害が出る、ということですか?

ハツチャン ……さつき、病室でナツヒコ君と会いましたけど、そんな障害がある
ようには、…あ、(ミドリと顔を合わせる)

ミドリ ……あの、私とハッチャンで、お茶を持っていったんです。3人だから3本。じゃあ、みんな欲しいってナツヒコ君に言われて……、

ハッチャン ……うん、あと、病室と家を勘違いしているみたいで、ミドリ ……それは、その、さっきの高次・脳機能障害なんですか？

お父さんはうなずいたようだ。

ミドリ ……事故の一次的なショックでとかいうんじゃないんですか？

お父さんはもう一度うなずいたようだ。

ミドリ ……そんな、

ハッチャン ……だって、……

ミドリ ……でも、詳しく調べないと分からないですよ、

ハッチャン ……そうなんですよ？

ミドリ ……あの、これから、ナツヒコ君は？ ……はい、はい。はい。

お父さんの話を聞いている、ミドリ、
ト、

ハッチャン ……高次脳機能障害は、事故などによって、脳の一部が損傷することで起こる障害だ。それは、見た目では余り分からないけど、例えば、感情のコントロールが聞かなくなる、

帰る家が分かっているけど、帰り道が全く分からないなど、いろいろなふだんの生活で私たちにとって当たり前のことが脳の損傷によって起こってしまう。お茶を全部ほしがったのは、一旦、自分が欲しいと思ったモノは手に入れてしまいたい。歯止めがきかなくなるのである。

ミドリ ……ナツヒコの場合、それは事故から一ヶ月半後の詳しい検査の結果、事故より前の記憶はきちんと持っていて、それより後、つまり事故から先の記憶は、一切憶えることが出来ないということだった。

一年前の記憶はある。でも、今さっき会った人は思い出せない。脳の中の記憶を司る部分が、損傷した、つまり、高次脳機能障害と診断された。

高次脳機能障害は、よくもならなければ悪くもならない。余程の奇跡が起こらない限り、そのまま一生を過ごすことになる。

ハッチャン ……僕とミドリは、正直、そんなことがあるのかと信じられなかった。そして、その意味していることが漠然としか理解できなかった。僕たちは疑うしかなかった。

ミドリ ……だから、そのとき、私たちはもう一度、病室に戻った。

(6 病室)

ナツヒコ … (さっきのお茶を持っている)

ハッチャン・ミドリ 意志を込めてノックする。

ハッチャン … ナツヒコ・・・

ナツヒコ … ああ、ハッチャン、ミドリ・・・

ミドリ … …

ナツヒコ … なんか、ゴメン、俺、事故起こしたんだってさあ

ミドリ … ナツヒコ、

ナツヒコ … うん？

ミドリ … … さっきも私たち来たんだよ、この部屋に。

ナツヒコ … ええ？またまたあ、

ミドリ … いや、本当だって

ナツヒコ … あのさ、台本をさ、

ハッチャン … 書いたんだろう、途中なんだろう、

ナツヒコ … あ、すごい、なんで知ってるの？

ハッチャン … うん・・・ (おどけて) すごいだろう！

ナツヒコ … うん、すごい。途中までしか書いてないんだけどさ、仕上げるよ、

ミドリ … …

ハッチャン … …

ミドリ … (部屋を飛び出してゆく)

ハッチャン … ミドリ・・・、ナツヒコ、あの、また、また来るから、

ナツヒコ … うん、また来てよ、うん

音楽

ハッチャン、ミドリを追う。

ナツヒコはそのままいる。

音楽が流れたまま暗転

(7 部室)

明かりがつくと、椅子を机のようにして、

突っ伏しているミドリがいる。

そこへ、ハッチャンが現れる。

ハッチャン … やっぱここにいたんだ。

ミドリ … ハッチャン・・・ハッチャン、(とハッチャンに抱きつい

て、泣き出すミドリ)

ハッチャン … (抱きつかれてどうしていいか分からない) あの、ミ、ミドリ、

ミドリ … … (離れて) どうしたらいいんだろう、あかし。

あかし、何もできないよ、なんにも出来ない。

ハッチャン …… (答えられない)
ミドリ …… なんて、ナツヒコがそんなことになるの、ねえ、どうして、どうしてこうなるの？

ハッチャン …… ミドリ、
ミドリ …… ナツヒコがなんか悪い事をした？ねえなんで？なんでなの？
ハッチャン …… 落ち着きなつて、

ミドリ …… 落ち着けないよ、落ち着ける訳がないでしょう、ハッチャン、
どうして、落ち着けなんて言えるのよ、

ハッチャン …… ゴメン、
ミドリ …… 謝ったつて、どうにもならないじゃない。

ハッチャン …… 時つて、よくあるじゃない？どうにもならないとき。
ミドリ …… そういう時さ、みんな神様に祈ったりするのも知れないけど、

僕は祈らないんだ。

先輩が言つてたでしよう、芝居は、人間しか出てこない、人間しか関係しない。全部、人間が作り出すモノ。

だから、そこで神様なんか頼ったらダメだと思ふんだ。

ミドリ …… 僕はもつと神様に祈らなくなると思う。
ハッチャン …… だからだから、神様はこんなことをナツヒコにするのかと思うと、

ミドリ …… 僕、ナツヒコの家に行つて来る。
ハッチャン …… どうして？

ミドリ …… ナツヒコの書いた台本探してくる。
ハッチャン …… ハッチャン、

ハッチャン …… ナツヒコに病室で続きを書いてもらおうと思ふんだ。すぐ書ける
ミドリ …… とは思えないけど、あいつに台本書いてもらおうと思う。

ハッチャン …… (大きな声で) あいつ、もう、大学も行けないかもしれないし、
就職もできないかもしれないんだぜ。じゃさじゃさ、あいつ何を
頑張つて生きていくの？

あいつは何を楽しみにして生きていけばいいの？

ミドリ …… ゴメン、大声出して。
ハッチャン …… うん、いいよ、ハッチャン、あたしもゴメン。言い過ぎた。

ハッチャン …… 気にするなつて。

音楽

ミドリ …… あたしも言つて良い？ナツヒコの家。

ハッチャン …… あれ？行つたことないの？

ミドリ …… ないよお、

ハッチャン …へえええ、
ミドリ …何、その「へえええ」っていうのは？
ハッチャン …いや、別に。
ミドリ …本当に行ったことないよ、うん。
ハッチャン …あそう。…ミドリ。
ミドリ …うん？
ハッチャン …ナツヒコの病室の番号さ、憶えてる？
ミドリ …番号？部屋の、
ハッチャン …うん、
ミドリ …え？4・7・
ハッチャン …4771。しなない、死なない。
ミドリ …当たり前じゃん、うん
ハッチャン …うん。

ハッチャン、ミドリ、部室を出る。

暗転
音楽

(8 病室 秋)

明かりがつく

病室には、ナツヒコ・ミドリ・ハッチャン
ナツヒコは、最初のシーンで出てきた大学ノートを持っている。

ミドリ・ハッチャンは、そのコピーか何かを持っている。

病室で読み合わせをしている

ミドリ …(台詞) 「でも、そこにいるのはあなたなんでしょう、ねえねえ」
ハッチャン …(台詞) 「違う、違う、僕じゃない」
ミドリ …(台詞) 「声色を変えても、私には見えるんです、あなたが、あ
なたの姿が」
ハッチャン …(台詞) 「見える？見えるのか？」
ミドリ …(台詞) 「ええ、見えるわ、私の目は見えなくても、ここで、こ
こで、見えています、サル。サル？」
ハッチャン …何これ、「サル」って、
ナツヒコ …ええ？あ、本当だ、「サル」って書いてある。あれ、俺書いたか
なあ
ミドリ …(台詞) 「サル。サル、見ざる聞かざる言わざるは日光東照宮に
ある。」なんだこれ、
ナツヒコ ……、あ、書いてあるねえ、あれ、おかしいねえ、
ミドリ …ナツヒコ、ちゃんと前まで書いたのを見た？
ナツヒコ …あれえ、

ハツチャン …分かった、ここでページが変わるから、真っ白だから、
ミドリ …ああ、そういうことかあ、
3人 …(笑っている)

ト、

ミドリ

…あの事故から、もう3ヶ月も過ぎた。台本をナツヒコの家から探し出した私とハツチャンは、それをナツヒコに渡した。

ナツヒコは、途中までの、事故が起きるまで書いている内容は、よく憶えている。しかし、続きを書くとき、記憶が上手く行けば、つながり、そうでなければ、今みたいに訳の分からないシーンから始まる芝居を書いてしまう。

文化祭に行く芝居を上演することは出来ず、

そのまま秋は深まってきた。

リハビリがナツヒコに対しておこなわれているが、

その成果は芳しくない。

ナツヒコ

…じゃあ、また書き直しだなあ、

ミドリ

…でも、この間より、7行進んだよ、

ナツヒコ

…もつと書きたいなあ、早く書けたような気がする、俺。

ハツチャン

…急いでもしようがないって、時間あるんだから、

ナツヒコ

…俺はいいよお、時間は。お前らじゃないかよ、時間がないのは。

今日は？いつ？

ミドリ

…ナツヒコ、分かる？

ナツヒコ

…(首を横に振り)…、寒くなってさつき思った。

ミドリ

…10月の20日。

ハツチャン

…うん、

ナツヒコ

…10月、20日。事故が7月の…、そんなに過ぎたんだ。

ミドリ

…まだ三ヶ月だよ、

ナツヒコ

…でも、もう、みんな受験勉強とか始めないとき。

ハツチャン

…そうだね、うん。

ナツヒコ

……、三ヶ月経つのか、ふくん、

ト、

ナツヒコはぼんやりと外を見る。

そんな時間

ナツヒコ

…でも、また、今のことも忘れちゃうんだろうなあ。

ハツチャン

…ミドリ…、

ハツチャン

…あのさ、

ミドリ

…何？

ナツヒコ

…？

ハッチャン… ああ、僕、今日、言おうと思ってたことがあるんだ。
ミドリ… 何？

ナツヒコ… うん、言つてよ、言われても忘れるんだろうけど、
ハッチャン… ああ、しばらく、ナツヒコと会おうのやめようかと思つて、
ミドリ… え？

ナツヒコ… (ハッチャンを見てる)
ハッチャン… ゴメン、そういう意味じゃないんだ、いや、そういう意味に思わ
れるかも知れないのは分かつて言うんだけど、やっぱり、受験と
かあるし、きちんと勉強しないとダメで。

ナツヒコ… うん
ハッチャン… この間、先生に言われて。このままだと、行く大学なんかないぞ
つて、

ミドリ… 別に、別にナツヒコと関係ないじゃん、
ハッチャン… うん、でも、僕は自分がそんなに器用な人間じゃないと思う。
どちらかというと不器用だ。うん、不器用だ。

ミドリ… そんなことナツヒコに言わなくても良いじゃん。
ナツヒコ… (ハッチャンを見ている)

ハッチャン… いや、ミドリに誘われたり、誘ったりして、この病室に来るのを、
うまく断れば、自然と僕は、ナツヒコから離れてゆくのかも知れ
ない。
でも、そういうのイヤなんだ。

ナツヒコ… うん、
ハッチャン… 僕、しばらく、自分のことを一生懸命するよ、そして、それがち
やんと出来たら、必ずまたナツヒコに会いに来る。

ミドリ… (ナツヒコを見る)
ハッチャン… だから、その、ナツヒコ、ゴメン。
ナツヒコ… …、うん。

ハッチャン… 怒った？
ナツヒコ… 怒るも何も、何にもないよ。うん、がんばれよ、

ミドリ… …、
ナツヒコ… ミドリ怒ってるの？

ミドリ… …、
ハッチャン… ごめん、
ミドリ… あたしは、きちんと来るから、

間

ナツヒコ… …、あのさ、…、もう来なくて良いよ、うん、
ミドリ… …、ナツヒコ、
ナツヒコ… …、多分さ、ミドリもハッチャンも、一杯、ここに来てくれているん
だらうと思うんだけど、俺、憶えてないんだって。

ノートの端っこにき、ミドリとか、ハッチャンが、「ミドリ参上」とか「ハッチャンですぞ」とか書いてある数だけでしか思い出せないんだ。

ハッチャン・・・
ナツヒコ・・・今、ミドリの着ている服を、憶えられないし、髪型が変わったとかそういうのも分からない。正直、いつ、ミドリとハッチャンが来たかも、だんだんわからなくなってくるんだ。

ミドリ・・・うん、
ナツヒコ・・・がんばれとか周りが言ってもさ、頑張ってるつもりなんだよね。こう見えても、

ミドリ・・・頑張ってるよ、
ナツヒコ・・・うん、でもさ、お前らに得なことないじゃない、俺とこうやってここにいたって。

ハッチャン・・・得とかそういうことじゃなくて、そんなこと言っちゃダメだよ。
ナツヒコ・・・俺は、変わらないんだぞ、変えたくても変わらないし、今日も、明日も、あさっても、このままなんだぞ。

そんなこと言っちゃ何がダメなんだ！
こうやって自分が今言ってることも、忘れてしまっただぞ！

間

ハッチャン・・・僕、じゃあ、帰るね。

ナツヒコ・・・、

ミドリ・・・あ、あたし、それでも、「ミドリ参上」って書くからノートに

ト、

ハッチャン、カバンか何かをおいて、

ハッチャン・・・ナツヒコ、この台本、必ず完成させるよな、ちゃんと前に進んでいるって。台本、進んでいるじゃん。

ナツヒコ・・・（ノートを手に取る）

ハッチャン・・・この台本、なんてタイトルにするの？

ナツヒコ・・・タイトル？

ミドリ・・・ナツヒコ、台本があがってからタイトル決めるもんね。

ナツヒコ・・・そうだったかあ？

ハッチャン・・・そうだよ、

ミドリ・・・なんかあるの、タイトル？

ナツヒコ・・・え？

ミドリ・・・タイトル、

ナツヒコ・・・うん・・・「たんぼぼん」っていうのにしようかなって、

ミドリ・・・「たんぼぼん」？

ハッチャン・・・何だよそれ、「たんぼぼん」じゃなくて、「たんぼぼん」

ナツヒコ .. うん、小さい頃ね、俺、たんぼぼの事を「たんぼぼん」って、言
ってたらしいんだ。
ミドリ .. うん、
ナツヒコ .. たんぼぼってさ、小さい花じゃない、だけどさ、すごい強い生命
力なんだって、根とかものすごく長いじゃない。
ハッチャン .. うんうん、
ナツヒコ .. 花がしぼんで綿毛になるとさ、あれ、面白がって口で吹いたり、
風で飛ばされるけどさ、あれって偶然なんだなあと思うんだよね。
ミドリ .. 偶然？
ナツヒコ .. あの種は、自分がどこに飛ばされるかわからないし、どうするこ
とも出来ないじゃない。だけど、その地にとどまったら、じーつ
と季節が過ぎるのを待って、春にまた、根を伸ばして咲く訳じゃ
ない。
ハッチャン .. うん
ナツヒコ .. えらいな、たんぼぼんって。偶然のところ、一生懸命頑張るん
だなって、そんなこと、出来ないなって。
ミドリ .. よく知ってるね
ナツヒコ .. うん、調べてみたらびつくりしてさ、
ミドリ .. でもさ、この目の見えないこの台本の主人公はさ、別にたんぼぼ
んと出会ってないよ、
ナツヒコ .. だから、それをこれからどっかで書くんだよ、
ミドリ .. 本当に？
ナツヒコ .. うん、本当だつて。
ハッチャン .. 忘れないように、今の内にノートに書いておこう。
ミドリ .. じゃあ、あたし、たんぼぼんの絵を描く。
ナツヒコ .. うん、大っきく書いてよ、
ミドリ .. (書いている) .. .
ハッチャン .. ミドリ、「ぼ」が多すぎるよ、「たんぼぼぼん」になってるよ。
ミドリ .. あ、本当だ。
ハッチャン .. 貸してみなさい。(書いている)
ナツヒコ .. おっきく書いてよ、
ハッチャン .. (書いている)
ミドリ、ハッチャン、
ハッチャン .. (書いている) 何？
ミドリ .. その花、ひまわりだよ。
ハッチャンうそ！
ナツヒコうん、ひまわりだ。
ハッチャン .. マジっすか！

ト、

ハツチャン…僕はこうして、ナツヒコとしばらく会わないことにした。学校でミドリと会々と、彼女もさすがに週に一回程度。でも、きちんとナツヒコに会いに行っていると聞いた。ナツヒコは変わらない、変わることが出来ない。僕やミドリは、少しずつ変わってゆく。ナツヒコも変わりたいんだらうと思う。でも、それが出来ない。その苦しさが僕には少しも分かることが出来なくて、それで落ち込んだりした。僕は、大学の推薦入試を受けることになった。

音楽

ハツチャン・ナツヒコはける

ミドリ

…ハツチャンが来なくなつて、しばらくしてから、ナツヒコは、自宅に戻つた。退院である。退院といつても、病気が回復したわけではない。病院にいる意味がないということでもあるのだ。ナツヒコは、歩けないとか、モノが食べられないというのではない。見た目は普通の人と変わらない。だからこそ問題がある。一旦外に出てしまえば、帰り道を忘れてしまい帰れなくなってしまう。

2、3度、ふらりと外に出てしまい、みんなが探しに出るといふこともあつた。

私はというと、先生に薦められた専門学校に入ることに決めた。それは、ナツヒコから遠く離れた場所に行つてしまふ事でもある。でも、私は専門学校にはいることに決めた。

年が明けて、春がまもなくやってくる。春になれば、本当にいいよお別れをしないと行けないときがやってくる。

私はその意味がよくわからない。いや、わからないフリをしているだけなのかも知れない。

ミドリはける

(9 部室)

舞台の明かりが変わり、そこには誰もいない時間が少し。

ト、
ハツチャンがやってくる。

ハツチャン…誰もいないね。

ハツチャン、部室内をうろろうした後、
「外郎売」を何気にしゃべり始める。

ハツチャン…拙者親方と申すは、御立合いのうちに、ご存知のお方もござりましようがお江戸を立て二十里上方、相州小田原、一色町をお過ぎなされて、青物町を登りへお出でなさるれば、欄干橋虎屋藤右衛門、ただ今は剃髪いたして円斎と名のります。

この間に、ミドリが現れる。

ミドリ…元朝より大晦日まで、お手に入れまするこの薬は、昔、ちんの国の唐人、外郎という人、わが朝へ来たり、帝へ参内の折から、この薬を深く籠め置き、用ゆる時は一粒づつ、冠のすき間より取り出だす、

ミドリ・ハツチャン…依つてその名を、帝より「頂透香」と賜る。

ミドリ…憶えてるモノですな

ハツチャン…憶えてるねえ、俺、面接の時さ、特技はありますか？って言われて、これやったの

ミドリ…外郎売？

ハツチャン…うん、

ミドリ…それで合格したんだ、

ハツチャン…それかどうかは分からないけど、うん、

ミドリ…ふふん

ハツチャン…ここにこうやって来るのも、もう少しだな

ミドリ…本当だね。

ハツチャン…ミドリ

ミドリ…何？

ハツチャン…今日、ナツヒコの家行こうかと思つて。

ミドリ…うん、そうだね。

ハツチャン…自分の心配が一つ解けたよつて、

ミドリ…うん、

ハツチャン…どう、台本？…進んだの？

ミドリ…あんまり…、

ハツチャン……そうかあ。

ナツヒコ…(袖声)ミドリ、ハツチャン(叫んでいる)

ト、

そこへやってきたナツヒコ。

手にあの大学ノートを持っている

ナツヒコ…お前ら、何だべつてんだよ、早く「外郎売」やれよ、20分後に通すんだぞ、

ミドリ…ナツヒコ、

ハツチャン…どうして？

ナツヒコ .. どうしてもこうしてもねえだろうがよ、あん、ハッチャン、
転換のキューあるだろう、後半のミドリが出てくるところ、あ
れ、大丈夫だよな、

ハッチャン .. う、う、うん
ナツヒコ .. 大丈夫なの、大丈夫じゃないの？どっちなの？
ハッチャン .. 大丈夫です。

ナツヒコ .. ミドリ、お前、立ち位置きちんと守れよ良いな、

ミドリ .. あ、はいはい

ナツヒコ .. はい、は一回

ミドリ .. はい。

ナツヒコ .. なんかわびしつとこねえな。よし。

ハッチャン .. (どこかを指さし) 思い出そう、あの暑い日々を。

ミドリ .. (そこを見て) 流した汗と涙はウソをつかない

ミドリ .. 頑張ろう、

ミドリ・ハッチャン・ナツヒコ .. 演劇！キラーン！

ナツヒコ .. よおし、行くぞ、俺、まだ音響と打ち合わせあるから、先行つて
るからな、体育館、すげえ暑い。ゲロロン暑い。(小走りではけ
ようとす)

ミドリ .. あ、ナツヒコ、

ナツヒコ .. なんだよ。手短に話せよ、

ミドリ .. うん、あのね、

ナツヒコ .. いいかあ、手短だぞ、

ミドリ .. この芝居って、・・・何？

ナツヒコ .. はあああ？、この芝居って、決まってるんじゃないかよ。

「たんぼぼん」だよ、ここに書いてあるだろうが。
早く体育館来いよ、いいな。

ナツヒコ、ハケる

たたずむ2人

携帯電話が鳴る。

ミドリ .. はい、もしもし。はい。はい。え？

ハッチャン .. ？

ミドリ .. (携帯をゆっくりおろしながら) ナツヒコ、死んだって。

ハッチャン .. は？

ミドリ .. 1人で外に出て、車に、車に。

ハッチャン .. ・・・、

ミドリ .. ・・・、

音楽

それは一番最初に流れていたモノが聞こえる。

暗転

(10 卒業の日)

演劇部の部室と思われる空間、最初と同じである。

ト、

ミドリとハッチャンが、卒業証書の筒を持ちやってくる。

ミド리는、1人で2本の卒業証書の筒と、一冊のノートを持っている。
2人の胸には花のコサージュでもついているのだろう。

ミドリ .. (ゆったりとした足取りで、部屋を歩く)

ハッチャン .. (その姿をぼんやりと目で追いながら、どこかに座る)

ミドリ やっぱり寂しいって感じるね

ハッチャン .. そうだな

ミドリ .. うん、寂しい。改めて寂しい。

ハッチャン .. いや。まだまだ。これから。うん、これからだ。

ミドリ .. そう、「君たちの未来は、今から始まる。」

ハッチャン .. (鼻歌ぼく) ♪ あおげばくとうとしくわがしのく . . . あのさ、

ミドリ .. ン? 何?

ハッチャン .. 壁にさ、なんか記念、残しておくか?

ミドリ .. 怒られるよ、

ハッチャン .. 先輩達が去年、書いてたよ、壁に。

ミドリ .. 書いてたねえ、

ハッチャン ..マジック、ないかな、. . . 何書く?

ミドリ (2本の卒業証書を見る)、ハッチャン。

ハッチャン .. 何?

ミドリ .. あたし、今からさ、もう一度、体育館戻ろうと思うの。

ハッチャン .. どうして?

ミドリ .. あそこでさ、私たち、一杯稽古したじゃない。あそこで、一杯、

喧嘩もしたし、泣いて笑ったじゃない。

ハッチャン そうだね。

ミドリ .. 舞台にお礼が言いたいの。なんか、発声してみたいし。

ハッチャン .. あめんぼあかいなあいうえお

ミドリ .. うん、きちんとお礼がしたい。ありがとうございますって。

ハッチャン .. そだね。壁に書いてちゃダメだよな。

ミドリ .. そうだよ。

ハッチャン .. あ、もう一つ、やり残してる事があるよ。

ミドリ .. え?

ハッチャン .. だって、ほら(と、ミドリの持つてるノートを指す)

ミドリ .. そうじゃん、そうじゃない。

ハッチャン .. よし、じゃあ、行こう。

ミドリ .. うん。

ハッチャン・ミドリ歩き出す。

ふと立ち止まる。

ミドリ .. 私は、今から体育館の舞台で、「たんぽぽん」を上演する。
ハッチャン .. そこには誰もいないし、誰も見ていない。

ミドリ .. でも、必ず、あの人が見ていると私は思う。きつと見ている。

ハッチャン .. うん、
ミドリ .. もう少ししたら、たんぽぽのいや、たんぽぽんの花が咲くだろう。

今一生懸命、太陽の光を求めて、葉を広げ、根を伸ばしているはずだ。

ハッチャン .. 変わらなかつたあの人は、変わらなかつたのに、私たちより先に変わってしまった。

ミドリ .. それを偶然と呼ぶのか、神様のいたずらというのか私は知らない。
ハッチャン .. 僕はもつと神様を信じなくなつてしまった。

ミドリ .. でも、神様がいなくても、私は一歩ずつ前に歩こうと思う。

ハッチャン .. それは他の誰でもない、私の、私の一歩だ。

ハッチャン .. たんぽぽんの花はやがて綿毛となり、いよいよ飛び出す時がやってくる。

ミドリ .. 偶然という風に運ばれるのだろうか、

ハッチャン .. 偶然という風に運ばれるのだ、

ハッチャン .. ミドリ .. たんぽぽんの種となつて、新しい大地でまた根付くのだ。

音楽が大きくなる。

遠くに、ナツヒコの姿が見える。

三人、正面を凝視したまま。

(終)

参考文献 .. 平凡社大百科事典

高次脳機能障害学 医歯薬出版

高次脳機能障害ポケットマニュアル 医歯薬出版

※なお、高次脳機能障害については、実際の臨床の立場から三重大学の医学部精神科の鈴木先生に取材をさせていただき、台本内容に対してのチェックや貴重なアドバイスを頂戴し、また患者さんやそのご家族のお言葉なども取材させて頂きました。この場を借りて、私の無理なお願ひにご協力してくださった皆様に深く御礼申し上げます。

作者 拝